

審査の結果の要旨

氏名 富永 眞由美

本研究は PDD 青年/成人にも適用可能で、対人関係成立に必要な基礎的能力を把握するためのアセスメント尺度を作成し、その尺度を用いて、教師が PDD 生徒の社会的対人関係能力の経時的変化を測定し、特別支援教育を実践する場において、支援計画立案に必要な情報を得ることを目的として行われたものであり、下記の結果を得ている。

1. Relationship Development Rating Scale (RDRS)は、情緒を基盤とした人との関わりを成立させるために基本となる、社会的対人関係能力の測定が可能であり、PDD 者において、その能力が相対的に欠如していることが示された。
2. RDRS は、高い内部一貫性を有し、一定の評価者間信頼性を有するものと考えられるが、初回と 10 か月後の評価者間一致率の結果から、評価者の習熟度が影響する可能性が考えられ、トレーニングの必要性が示唆された。
3. RDRS は、現時点の対人関係発達の程度を評価するだけでなく、特定の行動側面の、より詳細な評価としての有用性が示唆された。
4. 集団的に見た場合、典型的発達児よりもずっと高い年齢で、経験共有を学び始めるのは、容易ではないことが示唆された。一方、個別の評価では、それぞれの特質は異なり、発達パターンは均一ではないことが示された。生徒に対し、経験共有を身につけるための基礎がどの程度であるかを見極め、個々に見合ったアプローチをできるだけ早期に開始することの重要性が示唆された。
5. RDRS の経時的変化については限界があり、アセスメント実施時期を含め、検討の必要性が示唆された。
6. RDRS 評価時のアクティビティ場面での詳細な観察から、言葉の遅れのある PDD 生徒への適切な指導方法に結び付くようなヒントが得られ、最適な目標設定のための有用性が示唆された。一方、高機能 PDD 生徒では、対人関係における、就労後の彼らの困難さを知る上で有用な情報が得られる可能性が示唆された。

以上、本論文は典型的発達児が経験共有に熟達していく過程で重要となる要素に着目した、独自のアセスメント尺度を開発し、教師が使用可能な尺度を提供した点で独創的である。また、PDD 青年/成人のエビデンスが少なく、支援体制の整備の必要性が認識され、早急な課題解決が望まれる昨今、経験共有という観点から、PDD 生徒の対人関係能力を前向きに評価し、行動を記述したことは、適切な支援に有用な情報を提供し得るという点で、特別支援教育の発展に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。